

# 基本となる文章構成に着目した論理的文章の指導

—小学校から大学までの小論文指導の方策—

増 田 泉

新島学園短期大学紀要 40号

(別刷)

2019年3月31日発行



# 基本となる文章構成に着目した論理的文章の指導 —小学校から大学までの小論文指導の方策—

増 田 泉

A study of teaching essay writing that focuses on basic  
logical structure

Izumi MASUDA

*Niijima Gakuen Junior College  
Takasaki, Gunma 370-0068, Japan*

## 要 旨

小学生に論理的文章を書かせるためには文章構成を指導することが必要である。基本となる文章構成を指導することは、小学生が論理的な文章を書く力を伸ばすことにつながる。基本の文章構成を用いて、日常生活を題材にした小論文を書く練習を継続すると、小学校高学年の児童は、他教科や社会問題を題材にした小論文を書く力を身につけることもできる。

本稿では、文章構成の指導をし、日常生活を題材にして書かせる練習を行うことが、大学生の小論文指導においても有効であり、論理的に思考して小論文を書く力の向上につながることを、実践をもとに明らかにする。

## Abstract

It is very important to learn basic logical structure to improve essay writing skills. By learning basic logical structure, primary school children can write essays. Writing essays on the subject of daily life can improve their writing skills about social issues. Teaching structure and how to write about the subject of daily life can be applied to university students. This paper proves the effectiveness of teaching writing skills through practice by focusing on the structure and the subject of daily life.

Keywords: logical structure, keywords, writing skill

## 1 論理的文章指導の課題

2017年告示の小学校学習指導要領では、国語科が言語能力を育成するための教育を系統的に計画し、実践していくための教科であるという位置付けが明確である。内容は「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」とで構成され、「知識及び技能」の中に「情報の扱い方に関する指導の改善・充実」が新設された。話や文章を正確に理解し適切に表現する力につながるように情報を取り出したり整理したりする資質・能力の育成が求められ、情報の引用の仕方や出展の示し方が小学校中学年の学習内容に含まれている。「書くこと」の指導事項に「構成の検討」が明記され、筋道の通った文章になるように文章構成や展開を考える必要性が示された。「論理的」という語は用いられず「説明的な文章」という語が使われているが、論理的に思考し表現する力の育成を意味しているのは明らかである。

これに対し、小学校の教師は論理的文章を指導する必要性を感じてはいるが、指導や評価に苦手意識のある人が少なくない<sup>(注1)</sup>。「ありのままに書きましょう」という「指導」や、思いつきのコメントを数行書く「評価」が行われている現状もある。「書くことがない」「どのように書けばよいかわからない」という児童の実態が改善されない。

同様のことが大学生にも見受けられる。段落意識のない感想文のようなレポートも多く、内容の吟味より先に書き方の指導が必要になる。小学校から大学教育まで、論理的に文章を書かせる指導には、課題があるといえる。

## 2 研究の目的

小学生の書く力の向上のため、基本となる文章構成を示して論理的文章の書き方を指導したところ、それまで書けなかった小学生が書けるようになり、一定の成果を得た。

本稿では、小学生と同様にして、大学生にも文章構成に着目させて書く練習を行うと、論理的文章を書く力の向上につながることを、実践を基に明らかにする。基本となる文章構成を指導することが小学校から大学までを見通した指導となることを示し、論理的文章の有効な指導法として提案する。

## 3 研究の方法

- (1) 指導に有効となる文章構成の要素について考察する
- (2) 小論文の効果的な指導法を整理する
- (3) 小学生と大学生<sup>(注2)</sup>に小論文の書き方を指導し、成果を考察する

## 4 系統的指導に有効となる文章構成の要素

本稿では「小論文とは課題について書く論理的文章」という点を踏まえ、「課題に

ついて書いた、小さな論理的構成をもつ文章である」と定義して以下の論を進める。

多くの論文の文章構成は序論、本論、結論で構成され、田中が「科学論文の標準的な構成」として挙げたように「①題名②抄録③緒言④研究方法⑤研究結果⑥考察⑦総括⑧結論⑨謝辞⑩文献」（田中，1982，p.21）となる。しかし，論理の組み立て方には研究者によって多少の違いが認められるので，先行研究を次に示す。

### （1）論理の中心となる「事実・理由づけ・主張」

井上は「言語による思考」を国語科の重要な課題であると述べ，トゥルミンモデルを国語科教育に取り入れた。「受け手を納得させるために必要不可欠なのは，結論となる主張とそれを裏付ける理由やデータや条件である」（井上，2007，p.83）とし，トゥルミンモデル6要素のうち「事実・理由づけ・主張」が論理の中心になると整理した。論理の精密性のためには「理由の確かさを示す限定（Qualifier）・反証（Rebuttal）・理由の裏づけ（Backing）」が必要であると示した上で，これらは「但し書き」と考えた方が分かりやすいと説明している。「事実と意見と理由とを区別」することの重要性を唱え，「意見」の中には「事実（根拠）の理由」を含めず別にする方が明確になると主張した。

### （2）三角ロジック

小学校や中学校国語科の授業で，論理の枠組みをどのように指導に取り入れるか，トゥルミンの論証モデルをさらに具体的に示したのが鶴田である。鶴田はトゥルミンモデルを単純化した「三角ロジック」を学校教育で活用する必要性を説き，論理の枠組みは「根拠・理由・主張の三点セット」（鶴田，2014，p.14）と名づけ，多くの教材例を示しながら指導法を紹介している。「根拠」と「主張」をつなぐ「意味づけ」が重要である点を強調し，論理的思考や文章構成を考える際に必要な観点を打ち出した。三角ロジックは，1つの例（根拠）について解釈し，意見を述べる思考ツールとしては汎用性が高い。

### （3）三角ロジックの限界

難波は「トゥルミンモデルは，ある特定の学問や法体系に関する論理の妥当性を判断するための図式」（難波，2018，p.52）と指摘し，トゥルミンモデルは明確な裏づけがある場合にのみ使える論理であると整理した。三角ロジックについては，論証の妥当性を保証する裏づけがないために，データ，理由づけ，主張だけで論理の妥当性を保証する必要がある（p.60）と説明し，さらに，「データ」と「理由づけ」の両方が事実の場合は相互に入れ替え可能になってしまう場合がある（p.62）点にも言及している。つまり，三角ロジックが成り立つのは日常レベルの論理性の中でデータや理由づけの妥当性がある場合に限ることが確認でき，どちらも学問レベルの論理性に限界があると分かる。

ただし、こうした限界を指摘しつつも、難波は、妥当性の導き方は学問レベルと日常レベルでは異なるという見方を示し、論理の妥当性が仮に低くても日常的なレベルで納得する場合があると述べている。日常レベルの論理性を鍛えるために書かれた小学校国語科の説明文教材の指導では、三段論法の思考法の鍛錬が必要だと整理した。

#### (4) はじめ・なか・まとめ・むすび

市毛もまた、「具体例（事実）」と「主張」をつなぐ役割をする段落が必要である点に着目しているが、井上、鶴田、難波等が「根拠・理由・主張」として1つの根拠を基に言葉で言葉を説明するのに対し、市毛は「複数の具体的事実は一見ばらばらな姿をしているが、実は一つの共通性によって選ばれている。その共通性を示すのが『まとめ』である」（市毛, 2010, p.68）と、具体例から共通性を抽出して主張することを論理と捉えた。つまり井上等が演繹的思考を論理性の中心としたのに対し、市毛の論理性では、主張を述べるために挙げた複数の具体例を束ねた共通する性質や感想が「考察」となる。複数の具体例を抽象化する帰納論理に基づく考え方である。

市毛はそれまでの作文指導と小論文指導の違いを明確にし、小論文を指導する必要を主張した。科学論文の書き方を論理的思考力と結びつけ、「段落の固有の役割を意識させる指導を行うことが、論理的なものの考え方の基礎を養う」（同上, p.69）と指摘した。日常的な現象についての報告や記録にも、様々な分野について主張を述べる場合にも活用できるので、この論理を基に児童や学生に小論文を書かせることは、論理的思考力を育成する指導になる。国語科で身につけた書き方を他教科での思考や表現に応用でき、論理的思考力、論理的表現力の向上のために大変有効な指導法だといえる。

市毛は小学生にも分かるように、段落を「はじめ・なか（1, 2）・まとめ・むすび」と名づけた。「なか」は具体例、「まとめ」は具体例に共通する性質や感想、「むすび」は結論である。また、小論文は学習として書く文章として位置づけ、論理的思考力を高め、書く力を身につけさせることを目的とした。

#### (5) 序論・本論（具体例・考察）・結論

長谷川は科学論文の書き方の先行研究を分析し、「論理的文章を成立させる上で不可欠な要素に『論理的な文章の材料・構成・パラグラフ（段落）の条件・事実の書き方』がある」（長谷川, 2016, p.96）として、「緒言、研究方法、研究結果、考察、結論、総括」の役割を整理した。研究方法・研究結果と考察の関係が帰納論理の思考法となる（p.97）点も示した。科学論文と市毛の主張する文章構成との共通性が明らかになった。

以上の先行研究についての考察から、小論文の文章構成を「序論・本論（具体例・考察）・結論」とし、小学生から系統的に指導できるように、市毛の提案した「はじめ・なか・まとめ・むすび」を用いて指導する。

## 5 小論文指導の重点となる五項目

小学校から大学までを見通した小論文の指導として、次の五項目を重点とする。

### (1) 文章構成と文字数の規定

文章構成「はじめ・なか・まとめ・むすび」と各段落の文字数を規定し、目安となる区切りの線を原稿用紙に引かせて段落の意識化を図った。

〈字数 400 字小論文の字数〉	第 1 段落	序論	はじめ (全体の概略)	40 字
	第 2 段落	本論	なか 1 (具体例 1)	140 字
	第 3 段落	本論	なか 2 (具体例 2)	140 字
	第 4 段落	本論	まとめ (考察)	40 字
	第 5 段落	結論	むすび (主張)	40 字

また、次に示すワークを用いて論理的な文章構成を確認し、文章構成表を作成させた。具体例と考察の関係の確認のために、数人の児童・学生に板書させて「なか」と「まとめ」に一貫性があるかどうか全体指導をし、各自が自分の文章構成表を確かめる時間も設けた。

### 小論文書き方ワーク

① 次の中で、「はじめ・なか 1・なか 2・まとめ」の関係が正しいものはどれでしょう。

おまつりにいった。 わたあめをたべた。 やきとりをたべた。 おいしかった。	おまつりにいった。 やきそばをたべた。 金魚をすくった。 三びきもとれた。	おまつりにいった。 金魚をすくった。 お金をおとした。 かなしかった。	おまつりにいった。 おめんをかった。 わたあめをたべた。 たのしかった。
--	--	--	---

② 次の記入例のように、文章構成表を作りましょう。

まとめ	なか 2	なか 1	〈まとめの表〉		○食器洗い	部屋のそうじ	洗濯ものたたみ	○お風呂洗い	玄関そうじ	〈なか〉	テーマ お手伝い	〈文章構成表記入例〉
のが難しい	きれいにする	お風呂洗い	食器洗い									

  

まとめ	なか 2	なか 1	〈まとめの表〉							〈なか〉	テーマ	〈文章構成表〉

## (2) 一段落一事項

論理的文章で「段落は意味のまとまり」という概念は重要である。次の点を指導した。

- 1 段落の中に複数の事例を入れず、段落には1つのことを述べる意識をもつ
- 2 段落の中心になる主要語句について、読み手に分かりやすく詳しく説明する
- 3 一段落に書かれる事項の核となる中心文は、段落の始めに書くと分かりやすい

## (3) 具体例の書き方練習

具体例には事実を書き、考察とは区別して書くことを小学生、大学生とも確認した。次に、大学生に行った「なか」を具体的に詳しく書く練習方法について、指導例を示す。

### ① 具体例に感想や意見がある場合には自分で線を引き、別の言い方に直す

「具体例」として自分が書いた一回目の原稿を読み返し、事実以外の感想や意見に線を引かせて区別することを意識させた。その上で、二回目の原稿を書かせた。

例1 (学生A) テーマ：先週の話 (DVD) ※傍線は学生

〈一回目の原稿〉 私は、先週ハイキューのDVDを見た。DVDは五枚に分けられていて、一枚に二話分の話が入っている。白鳥沢学園と鳥野高校の戦いだけを描いて見ているだけで勇気がわき、部活を頑張ろうと熱くなれる。そのDVDは二日で見終わってしまうほど面白かった。

〈二回目の原稿〉 私は、先週の日曜日、「ハイキュー」のDVDを借りた。DVDは五枚に分けられていて、一枚に二話分の話が入っている。白鳥沢学園と鳥野高校の春の高校バレー全国大会出場をかけた試合の話だ。そのDVDのレンタル期間は一週間だが、借りた日から二日間で見終わった。

この実践では、学生の書き方に三点の改善が見られた。まず、一回目の原稿では何のスポーツか説明がないが、二回目の原稿は「高校バレーの全国大会出場をかけた試合の話」と具体的になり、全体像が分かる。次に、二回目の原稿ではDVDの題名を明記し、具体的なイメージがわく。表記の仕方も意識した。三点目は、自分で感想や意見に印をつけたことによって「事実を書く具体例」に「感想」を入れずに書こうと意識できた。二回目の原稿の「レンタル期間が一週間であるのに二日で見終わった」という事実の記述から、楽しめたことも伝わってくる。

「事実を具体的に」と意識することで具体的で詳しい記述ができ、改善した。

② 同じ題材について書いた文章を学生が読み合い、その後に改善した文章を書く一回目の原稿を書いた後に互いに読み合ったり聞き合ったりした感想を書き、二回目の原稿を書かせた。自分の文章を見直す時間を設けることによって、どうしたら詳しく書けるか、どのように書いたら分かりやすいかという点に注目できると考えた。

例2 (学生B) テーマ：G棟 21 番教室

※傍線は増田

〈一回目の原稿〉 G 21 は二階にあり，入り口は二つある。十七行十二列の椅子があり，二百四人が座ることができる。前方には大きな黒板がある。ローラーつきの移動式黒板もある。黒板の左右にはスピーカーがあり，先生がマイクで話す声流れる。天井にはスクリーンが収納されており，パソコンの画面を映しながら授業を行うことも可能だ。白い壁と大きな窓が開放的で清潔な印象を与える。

〈発表後の感想〉 発表者のは，机の説明が分かりやすかった。「黒板から見て中央」「階段に近い入り口から入って」など，具体的な動作から見たものを書いていて想像しやすかった。「だらだらと書き続ける文より，簡潔な文の方が何倍も読みやすく，聞きやすいのが，体験してよく分かった。」同じ教室でも何通りもの文章があって面白かった。自分が書きたかった表現を書いている人がいると，まさにこれが言いたかったと思う場面があった。簡潔に書けるように練習したい。

〈二回目の原稿〉 G 21 は二階にあり，入り口は二つある。全体が白い壁で，入り口正面の上半分が全部窓なので，外の景色が見える。机は黒板から見て中央が七人がけ，その両側が五人がけで縦に十二列あり，全部で二百四人が座れる。移動式のスクリーンが天井から下りて，パソコン画面を映すことができる。黒板の左右にスピーカーがあり，先生がマイクで話す声もよく聞こえる。

二回目の原稿では教室の全体像を先に書き，その後細部を説明する書き方変わった。一回目の原稿でも机の数を書いていたが，二回目では配置が分かる書き方になっている。また，一回目の原稿では「開放的」「清潔」と抽象的な表現を用いたが，二回目では具体的な説明だけで，「開放的であり清潔感のある教室」を表現することができた。

互いに文章を読み合うことで，書き方のよさや具体的に書くことの重要性に気づいたといえる。数や色によって分かりやすくなることにも着目し，改善につながった。

#### (4) 考察と結論の整合性

「まとめ」は，「なか」の複数の具体例を抽象化して「具体例に共通する性質」・「具体例の意味」「具体例のまとめ」等，「具体例」がどのように主張と結びつくかの意味を「考察」して述べる役割をもつ段落である。具体例を抽象化した「まとめ」を書くことができれば，具体例と考察が一貫する，筋の通る文章になる。また，「まとめ」の段落に書いた考察を一般化したものが「むすび（結論）」となる。小学校中学年ぐらいまでは考察と主張の区別をつけることが難しいので，無理せず「まとめ」だけを書かせるが，高学年から中学生ぐらいで「むすび」が書けるようになる。

大学生の指導では，まず，文章構成表の作成の際に「考察」を先に書かせた。次に「考察」を一般化させて「結論」を書かせ，その後，それにつながる具体例を選んで書くよう

にさせた。この手順により、主張の基になる具体例を選んで文章化することを意識する。また、具体例と主張をつなぐ「まとめ」を見直すことで、より整合性の高い文章になる。

### (5) 日常生活を題材にした練習用小論文

小論文の書き方を学ぶ練習用の題材と、書き方を活用して小論文を書く題材とを分け、練習用では日常生活を題材にした。日常的な題材を選ぶ理由は次の二点である。

一点目は、日常体験について書く場合は自分の既知の内容の中から具体例を選ぶので、具体例を取捨選択する練習がしやすい。小学生でも大学生でも、自分が経験して知っているものから具体例を選んで書くことが、自分の書きたい「考察」や「結論」に合うように具体例を整理するよい練習になるのである。

これに対して、調べた内容や講演で聞いた内容を小論文に書くには、調べたり聞いたりした、それほど多くない内容から具体例を選ぶ必要がある。逆に言えば、適していない具体例を捨てることになるので、「せっかく調べたのに」「これも聞いたのに」という意識が働いて「捨てる」のが難しく、具体例が多くなる。短い文章で具体例が多いと、一例についての記述が荒くなって羅列に近くなり、論理的に書く練習にはなりにくい。

日常生活と論理的思考の関係について、井上が「論理的思考というのものも、物事に接して感動し・驚き・疑問や腑に落ちない感じを持つというような、実感・心情を含めた生活全体を基盤として、その中から出てくる」(井上,2012,p.175)と述べているように、論理的思考の基盤は日常生活が基になるのである。

「家の仕事」の小論文を書いた大学生から次の感想を得た。

「家の仕事」ならサッとかけると思ったが、日常生活の中から具体例を探して詳述し、自分の主張を述べるのは難しかった。こうやって小論文を書くことを、高校生のときの自分に教えたい。書き方が分かれば、もっとしっかりした小論文を書くことができた。ずっと自己流で書いていたので、感想も事実も関係なく書いて全部感想のような小論文だった。

この学生は「大学生なのに（小学生のように）家の仕事についての作文を書かされた。」とは思っていない。現実から例を選んで具体的に説明し、それを基に考察と主張を書く練習をしていることを実によく理解しているのが分かる。

理由の二点目は、互いの小論文の評価をしやすいためである。共通の体験があるものを題材にすると、書き方や「まとめ」への抽象化を互いに学ぶことができる。書いた文章を板書させることにより、一斉指導の中でも互いの文章を読み合うことができる。授業中の教師の評価は、同時に書き方の指導になり、書く力を向上させるのに効果的である。

〈小論文の書き方を学ぶ練習用題材：日常生活〉

小学生のための題材例……「家の手伝い、全校遠足、掃除当番」等

大学生のための題材例……「家の仕事、中学や高校の部活動、アルバイト」等

## 6 小論文指導の実践例

小学生と大学生に、日常生活を題材にした練習用の小論文の指導例を（1）、基本の書き方を活用した小論文の例を（2）として、以下に示す。

### （1）練習用の小論文の比較：題材「家の仕事」

#### ① 小学生の小論文 例3 児童C（第5学年）

まとめ	なか2	なか1	はじめ
<p>仕事が終わった時には手が赤くなってしまった。これからもお母さんのお手伝いをもっとしたいと思った。</p>	<p>お風呂そうじは月曜から木曜までやる。ふた、よくそう、おけの順で洗う。洗剤をスポンジにつけて上からこする。底はとどかないので、お風呂の中に入ってこする。お風呂の床もそのあとこすって、あわを水でながすと終わる。</p>	<p>夕食の皿洗いときどきやる。まず、みそしるのおわんを洗う。スポンジですって水を流し、かわかすところに積んでいく。油物は洗剤をつけて、よこれがおちるまで洗う。洗ったらあわをよくおとす。たまに、なべも洗う。なべは重たいし、よこれがいっぱいだ。手が痛くなる。</p>	<p>私の家の仕事は、食器の片付けとお風呂そうじだ。</p>

#### ② 大学生の小論文 例4 学生D

むすび	まとめ	なか2	なか1	はじめ
<p>自分の家には必要な仕事なので、これからも続ける。</p>	<p>いずれも手が荒れて、大変な仕事である。</p>	<p>亀の水槽も一週間に一回洗っている。曜日は決めず、夕方に時間があるときに、外に水槽を持って行って行き、中に入っている石など水槽の中の物を全部取り出して洗う。最後に、亀の甲羅も汚れているので、歯ブラシで洗う。</p>	<p>シンクの掃除を毎週日曜日にする。汚れが目立って来た場所が白くなるまで磨いている。タワシでも茶渋などの頑固な汚れは落ちないため、スポンジに洗剤をしみこませて磨いたり、使わなくなった歯ブラシで狭い部分をこすったりし、道具を持ち替えて掃除する。</p>	<p>私が毎週必ず行う仕事有二つある。</p>

児童Cと学生Dの小論文についての考察を次のように整理する。

まず、「まとめ」「むすび」についての意識が小学生と大学生とでは異なる。児童Cも「なか1・2」に共通することを「まとめ」に書く意識はあるが、「まとめ」の1文目と2文目の間には飛躍がある。「まとめ」の続きとして「むすび」が出現しているが、書き分けられるまでには至っていない。一方、学生Dの小論文には、「まとめ」の「大変な仕事」を基にして、「大変な仕事だ」⇒「大変な仕事は家の中で必要な仕事だ」⇒「だから、これからも続ける」と思考する論理展開が認められ、飛躍がない。「まとめ」をさらに一般化して抽象度を上げた「むすび」を書くことを意識している。

小学生の場合、低学年から指導しても「まとめ」と「むすび」を書き分けられるのが高学年くらいだったのに対し、大学生の多くは一回目の小論文で『むすび』は『まとめ』の一般化であり、主張であると理解し、「はじめ・なか1・なか2・まとめ・むすび」の構成で書くことができた。

二点目として、「まとめ」の内容に違いが見られた。小学生の「まとめ」には「たいへんだった」「めんどうだ」「がんばった」等、共通の感想が多く書かれていたのに対し、大学生の「まとめ」には「どちらも時間がかかる」「寒い日にはつらい作業である」等、共通の性質が書かれており、単なる感想ではない。「まとめ」を比較すると下例のようになる。

	例5	例6
	小学生 どちらの仕事も大変だ。 (まとめ)	一つ一つしっかりできた。 (まとめ)
大学生 どちらも手間が掛かる面倒な仕事といえる。 (まとめ)	母にやってもらうばかりでなく、家の仕事は家族で分担すべきだ。 (むすび)	毎週続けていて、終わると達成感がある。 (まとめ)

※傍線は増田

例5の小学生の「まとめ」の「大変だ」は漠然とした感想だが、大学生の「手間がかかる面倒な仕事」では仕事の性質が述べられている。例6の「しっかりできた」と「達成感がある」とを比較すると、どちらも具体例を抽象化しているが、大学生の「まとめ」では明らかに高次の抽象が行われている。同じ文章構成で同じ題材について書かせても、大学生は具体例についての自分なりの意味づけを「まとめ」として書いていて、小学生の文章とは抽象度が異なるのである。「まとめ」が具体例の抽象化だと理解したので、違いが出たと考えられる。大学生の文章には「論じる」視点が表れたと見ることもできる。

## (2) 書き方を活用した小論文の比較

日常的な題材で書く練習をした後、同じ文章構成を用いる書き方を活用して学年に応じた題材で小論文を書く学習につなげる。小学生には他教科での学習や身近な社会問題について、大学生にはクラス全員が共通して読んだ文章や講演内容を題材にして小論文を書かせた。

### ① 小学生の小論文 例7 児童E (第6学年) 題材:「日本の農業」 傍線は増田

はじめ	なか1	なか2	まとめ	むすび
秋田の祖父から新米が届いた時、私は新聞にあった「過疎化」のニュースを思い出した。	農林水産省が出している「農業就業人口及び基幹的農業従事者数」という表があるが、その表の「平均年齢」には、平成二十二年度には六十六・一歳でその後徐々に上がり、二十七年度では六十七・〇歳まで上がっていた。この数字が上がっていると言ふことは、若い年齢の人が少なくなっていることを示す	社会で、「過疎化」は人口が急激に減少したために、地域社会の機能が低下し、住民が一定の生活水準を維持することが困難になったことだと学習した。若者は田舎で働く場所が少なくなったために都会に出て行ってしまふ。農業では、定期的に休めず、天気の悪化によって収入が不安定になるのも原因だという。	農村の過疎化が進み、特に若い年齢の人が少なくなっている。	このままでは農業が成り立たなってしまうので、過疎を解決しなければいけない。

### ② 大学生の小論文 例8 学生F 題材:「生きるということ」(注3) 傍線は増田

はじめ	なか1	なか2	まとめ	むすび
串田久治(2008)は「無用の用」において、次の二点を強調している。	串田は「目に見えない無用」について、「見何の役にも立たないように見える『無用』がいかに大切であるかに気づく」と述べた。人々が持つ価値観や錯覚によって無用なもの意識的に排除しようとするのではなく、考えを転換し、多様な価値観が存在する中で「無用」の大切さを主張している。	また、串田は、人々にとっての「無理をしない生き方」について、「水のようにしなやかにしたたかに生きることが本当に強く生きること」だと言及している。水のように柔軟に生きることが最も自分の生き方をよくすることができると言える。	この文章から学んだことは、一つのものの見方にとらわれずに生きるということだ。	私は、豊かな人生にするために様々な見方をして、自分の人生をつくっていききたい。

例に挙げた二例の小論文では、学んだ書き方を活用して主張を述べることができている。児童Eは農業就業者数の資料と社会科の学習を基に、過疎化によって農村の若者が減少する課題について述べた。「むすび」は「まとめ」の一般化した内容になり、

書き分けができている。高学年になると、練習を繰り返した成果が表れると見ることができる。

また、「なか1・2」の傍線部の前までが資料や学習内容（事実）の説明であり、傍線部はその意味づけとなる一文である。そして、その共通性は「まとめ」として書くことができた。つまり、資料として用いた例が、なぜ自分の考察や主張と結びつく根拠となるのかを意味づけし、その意味づけを抽象化した考察を導き出すことができている。これは、長い小論文や感想文を書く際にも活用できる書き方である。

今回は400字詰め原稿用紙1枚で書いた小論文例を示したが、具体例を3例以上にしたり各段落の文量を長くしたりすることで、長文は書くことができる。実際、指導した第6学年のクラスでは、小論文の字数を増やす場合に、各段落の文字数をそれぞれ増やせばよいことと、文字数を変えるためには具体例の説明の詳しさを変えればよいことを理解しており、同様の課題で1200字程度の小論文は書くことができた。

一方で、大学生の小論文の具体例（なか1・2）の傍線部は、課題となる文章からの引用についての意味づけである。これは、児童Eの小論文の書き方と同様であり、今後レポートや論文を書く際に活用できる書き方だといえる。指導前の文章では、具体的事実を書くべき箇所に「～と思う」「～と考える」といった感想が多く入っていたが、この文章には見られない。具体例と考察との区別を意識した書き方になっている。

また、「まとめ」には「なか1・2」の共通性が書かれ、「むすび」につながっている。「むすび」には、やや飛躍があるが、「一つのものの見方」から「様々な見方」としており、一応の抽象化が認められる。

他にも、次のような題材例を小学生と大学生の小論文の課題とした。

- 〈小学生〉
- ① 理科との関連：「てこのつりあい」「人と動物の呼吸」
  - ② 社会との関連：「水不足解決のための工夫」「日本の農業」
  - ③ 道徳との関連：「自分に響いた言葉」「電車でのマナー」
  - ④ 家庭との関連：「野菜の栄養」「枝豆のゆで時間」
  - ⑤ 社会問題       ：「森林が減少する環境に目を向けて」「新聞とインターネット」
- 〈大学生〉
- ① 課題の文章について：「幼児期の遊び」「生きるということ」「民主主義」
  - ② 講演内容について       ：「講演から学んだこと」

## 7 研究成果及び今後の課題

文章構成に着目させることで段落の役割を意識し、小学生も大学生も、主張と根拠を明確にして論じようとした。帰納論理を基にした文章構成を提示し、段落の役割に着目させて書く練習をしたことが、書く力の向上につながった。「はじめ・なか・まとめ・むすび」を用いた文章構成で指導することが有効だといえる。

次に、大学生に具体例の書き方の指導を試みたところ、明らかに文章は改善した。このことから、自分の文章を客観的に評価できる学年には、こうした具体例の書き方の指導が有効であるともいえる。考察となる「まとめ」の書き方においても、大学生には「論じる」意識が高くなることが認められた。同様に指導する場合でも、学年に応じた指導の工夫が必要であり、その効果にも違いが出てくるのが分かる。

また、日常生活を題材にして具体例を選ぶ練習したことを活用して、他の課題についても小論文を書くことができた。ただし、児童Eと学生Fの文章の比較から分かるように、小論文の完成度は学年差のみで変わってくるわけではない。小学生に指導した練習用小論文の数が大学生に指導した数と比べてかなり多いために、小学生も書き方に習熟したためだと考える。継続した指導の必要性は明らかである。

小学生から大学までの学びを見通し、本稿で述べた小論文の書き方指導を進めることで、論理的に書かせる指導が確立していない現状を改善できる可能性が見えた。基本的な文章構成を示し、段階を踏んで継続した指導を行うことが、論理的思考力の育成と論理的表現力の向上につながると考える。小学校低学年の段階から大学生までの継続した指導が必要なのである。

今後は、指導事例を増やしてさらに検討し、効果的な小論文の指導法を確立する。そのために、段階的に情報を正確に理解する力を育てる教材を作成し、基本の文章構成を基にした意見文や論説文・レポートの書き方の指導を続け、指導実践を基に効果を検証することが必要となる。目指す研究成果は、論理的思考力・表現力の質的な向上を系統的に行うことのできる指導法の開発である。今回示した成果を基に、有効な練習法をさらに検討していきたい。

### 注 釈

- 1 増田泉(2018)「論理的思考力を育成する小論文指導の評価の一考察—小学校高学年の実践を例にして—」全国大学国語教育学会第135回大阪大会要旨集参照 東京都内の教員60名を対象とした「小論文の指導と評価」に関するアンケートの結果、「苦手意識がある」と答えた教員の割合が全体の3分の1程度だった。小論文指導に取り組んでいる学校や地域での調査だったが、3分の1の教員は依然として苦手意識をもっている。

- 2 対象とした学校は、増田の前勤務校と現在の勤務校である。東京都世田谷区立砧南小学校の児童と、新島学園短期大学の学生に指導した実践例を示した。
- 3 課題にした文章について考えたことを書かせた。用いた文章は次の通りである。  
申田久治（2016）「誰かの役に立たなければ生きている価値はないのか」『高校倫理の古典でまなぶ哲学トレーニング1 人間を理解する』岩波書店

#### 参考文献

- 市毛勝雄（2010）『小論文の書き方指導 4時間の授業で「導入」から「評価」まで』  
明治図書
- 井上尚美（2007）『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—（増補版）』  
明治図書
- 井上尚美（他）編（2012）『論理的思考を鍛える国語科授業方略』溪水社
- 田中 潔（1998）『手ぎわよい科学論文の仕上げ方第2版』共立出版
- 鶴田清司（2014）『授業で使える！論理的思考力・表現力を育てる三角ロジック：根拠・理由・主張の3点セット』図書文化
- 難波博孝（2018）『ナンバ先生のやさしくわかる論理の授業—国語科で論理力を育てる—』  
明治図書
- 長谷川祥子（2016）「中学校国語科における論理的文章の基本的な指導事項」『全国大学国語教育学会国語科教育研究 第131回大会研究発表要旨集』pp.95-98